

## 談話室

### 梅雨とカビ —歴史的考察—

大阪市立環境科学研究所 濱田信夫

#### カビとい名の由来

カビという呼び名は、古代から同じだったようである。

白川静氏の『字訓』によると、カビという言葉の語源は、葦牙(あしかび)のカビと同じであるという。牙の字はくさかんむりを付ければわかりやすい。葦の芽の意味である。植物の芽がほのかにめばえる状態のものをいう。有機物に生ずるカビも同類のものと考えられたのであろう。『古事記』にはカビの神が登場する。

次に国稚(わか)く浮きし脂の如くして、くらげなすただよへる時、葦牙(あしかび)の如く萌え騰(あが)る物に因りて成れる神の名は、宇摩志阿斯訶備比古遲神(うましあしかびひこちのかみ)、次に天之常立神(あめのとこたちのかみ)。(『古事記上巻』)

葦の若芽のような芽ふく生命力から生まれた神という意味である。現在のカビに対するイメージとはかなり異なるように見える。

江戸時代の辞書である『箋注倭名類聚抄』に、「穢(くさる)食上に白毛を生ずる者なり。まさにカビである。

『字通』(白川静著)によると、漢字の黴の部首は黒である。また、微生物の微の字と語源は同じで、音読みのバイ・ビは、微(ビ)や煤(バイ)など関係が深い。後漢の許慎の『説文解字』に「久雨に中(あた)りて青黒きなり」とあり、湿ってカビが生え、青黒い斑点となることをいう。黴という漢字には、まさに細かくて、黒っぽいものの意味がある。

明治時代に西洋科学が紹介されるまで、カビが科学的にどう捉えられていたかは不明である。たとえば、19世紀初期に刊行された『本草綱目啓蒙』(小野蘭山著)では、薬になりそうならゆるもの、草木、虫魚、さらに石や土について解説されている。麴については、「本邦の製は米のみにして他物を雑(まじ)へず。」と記されているものの、いわゆるカビには触れられていない。

“つゆ”の字を『広辞苑』で引くと、梅雨、黴雨の2種類の漢字が出てくる。前者は、梅の実が熟する時期との意味、後者は、カビが生えやすい時期だからと言われているようだ。その他、梅毒の意味で、明治時代には黴毒という字を書いた。これは、黴菌(ばいきん)の表現と同一と思われる。

様々なカビの中でも、いくつかの一般的なカビについては、和名が付いている。

植物の和名を見る限り美しい花にはオシャレな和名が付いているように思える。まさに、名は体を表す。カビの場合は、青カビ、赤カビ、黒カビ、黒皮カビのほか、煤(ス)カビ、土青(ツチアオ)カビ、毛玉カビ、毛カビ、蜘蛛の巣カビと研究者のセンスや思い入れが伝わって来るような名前がないのが残念だ。まさに、梅雨の暗く湿っぽいイメージにぴったりのネーミングだと思う研究者を含め、カビを美しいと感じる人はいないのだろうか？

## カビと古典文学

庭音の村本(もと)の名は庭酒(にわき)なり。大神の御糧(みかれひ:食糧)沾(ぬ)れて糶(こづじ:かび)生えき。即ち、酒を醸(かも)さしめて、庭酒に献(たてまつ)て、宴しき。」

これは、古事記と同時代の8世紀前半に書かれたという『播磨国風土記』の一節で、醸造にコウジカビを利用するようになったことについて述べられている。さすがに、コウジに関する記述は、同じカビでも言わばハレに属して明るく、ケガレに属する一般カビとかなり趣が異なる。岩波『日本古典文学体系』で見るとカビに関する記述は多くない。

コウジの話以外には、やはり古い、暗い、小さいイメージが、現代と同様につきまとっている。『源氏物語』の橋姫の章の後半には、カビについての記述が2カ所に見られる。

さやかに押し巻き、(體言状などを)あわせたる反故(ほうぐ:文殻)どもの、黴くさを、袋に縫ひいれたる、取りいでたてまつる。」

紙魚(しみ)という虫の住みかになりて、古めきたる黴くさながら、跡は消えず、たゞ今書きたらむにも違わぬ言の葉どもの、……」

カビに関して、視覚的特徴についての記述は少ない。嗅覚からカビを認識しているが、これは的を射ている。カビは生育している時に臭く、乾燥してしまうとあまり臭わないからだ。カビ臭から派生した古くさいの意味で用いられている。この場面は10月のもので、カビは梅雨の時期だけのものではない点にも注意が必要だろう。江戸時代に入っても、浄瑠璃などでは、古い、粗末なというイメージがカビという言葉で表現されている。但し、カビに対する嫌悪感は感じられない。

大名客の襟に付(へつらい付く)御勿躰(もったい 尊大なこと)で糸すか。我等が様な浪人の黴た襟にはつかれまいと。」(浄瑠璃集、ひらかな盛衰記)

随分かびのはへた半太夫ぶし(浄瑠璃の一流)をもつれだち、」(近世随想集、ひとね上)

「はなに泣く(櫻の黴とすてにける」(連句篇、冬の日)

連句の中で、松尾芭蕉はこのようにカビを取り上げている。「この一句は、花を風雅の最たるものとして憧憬するが、これも桜の木に生じた黴にすぎないと悟ったの意。」との解説が付加されている。

芭蕉の桜の満開の花と些細なカビとの対照は見事である。しかし、非常に抽象的なカビのとらえ方といえる。一方、カビを梅雨や雨漏りなどと関連づけたものは、江戸時代に次の編がある。梅雨時の大雨には男性的な雨垂れの響きがありカビにも「芦の芽」のようなはつらつとした生命力が感じられる。

五月雨の降りつゞきて、衣類に黴もみな(水無)月の氷餅、」(風来山人集、風流志道軒伝)

五月雨漏尽(もつく)して 畳障子(しょうじ)かびくさく 打(ち)臥(す)処(も)いと不自由なり」(芭蕉文集、俳文)

近代になって、大正 昭和と活躍した俳人飯田蛇笏には、愛着す づす黴みえし 聖書かな」懐紙もて バイブルの黴 ぬぐふとは」のような句がある。カビという季語は近代俳人が発見し、和歌や連歌では使わない。常識的に嫌われるものを意識的に面白がって使うのが、俳句の伝統だそうだ。2句はいずれもカビを見据えている。虫眼鏡などが普及して、カビも一般的に観察されるようになったためかもしれない。

文学で取り上げられてきたカビは、梅雨と必ずしも重ならない。子供の頃に入るのが怖かった「納戸」のイメージと重なるように思える。

暗い部屋。梅雨の季節からむし暑い季節へ、それぞれ懐かしいかびの匂いがただよふ納戸。(中略)母の生家にあった納戸の板戸も、赤く鈍い光を放っていた。その戸にも、かびのように不思議な暮らしの匂いがしみついていていた。」

[1]

## 梅雨と雨漏り

今から約 40 年あまり以前、私の家は藁葺きの屋根で、長雨になると必ず雨漏りがした。畳の上にバケツやブリキの洗面器を並べて、ポトン、ポトンと落ちてくる雨の滴を眺めていた。その当時は蛍光灯もなく室内が薄暗くて、意識していなかつ

たが、雨漏り跡の残る天井や畳には多くのカビが生えていたに違いない。

梅雨期にカビが多いのは、蒸し暑い気候が原因と言うより、雨漏りがその主因と思われる。これは、古代から今日まで変わることなく続いてきたことだろう

明治9年(1876年)に来日し、大森貝塚の発見者としても有名な、アメリカ人モース氏は、当時の日本の住まいについて、次のように書いている[2]

「春とか雨が降り続くときとかは、畳は湿気を含んでかび臭くなる。したがって、日当たりのよいときには畳を取り出して、家の前に、トランプカードのように並べ立てて干すのである。」

明治11年(1878年)6月から9月にかけて、東北地方を旅行したイギリス人イサベラバート女史は、青森県碓氷関付近で6日も降り続く大雨にあって、「(宿の)屋根裏の天井のない部屋」に宿泊していた時の状況を以下のように記している[3]

私は、大雨のため二日もここに足どめされている。ベッドは湿り、着物は湿り、何でも湿って、靴やかばん、本は黴ですべて緑色になっている。(中略)私は最後の残り物、ブランド肉入り糖菓の一箱を開けてみたところが、黴の塊となっていた。ここで着物を乾かすには、焚火の上に吊すほかない。そこで私は、いっそのこと壁にかけて黴させることにした。」

雨漏りは屋根の構造との関係が深い。中世の京の町を描いた『路中洛外図屏風』をみると、住宅の多くは板葺である[4]。檜皮(ひわだ)葺は、御所や將軍邸のような上層階級の住宅に使われているだけである。草葺屋根の家は農家であったという。草葺きに用いる藁や茅は、雨ざらしに放置すると、しき腐る。草葺屋根は一般に急勾配で雨の大半を流れ落ちやすくし、囲炉裏や竈の煙でいぶして、茅を長持ちさせていたという

江戸時代でも多くの町の家屋では、薄い板を重ねて葺き、板の上に枝や丸太材、あるいは石を載せて押さえている程度の板葺だったという。板葺は、草葺に比しても雨漏りしやすく、長雨には弱かったと思われる。

本瓦葺は、江戸時代の中期までは寺社や城郭さらには武家屋敷や商家に限られていたと言ってもよい状況だった[4]。18世紀の前半に、火事の延焼を防ぐため瓦葺が奨励されるようになった。それに伴って、棧瓦葺というより安価で、葺きやすく、軽い瓦が普及したと言われている。但しこれも、風や地震で瓦がずれると雨漏りがしたという

明治12年(1879年)の屋根の構造については、東京15区の家屋棟数約13万のうち、約7万棟が板葺、長屋の多くは板葺で、瓦葺は約5万棟だった[5]

明治以降、瓦葺の家が増えて、町ではほとんどが瓦葺になった。一般に使われていた棧瓦も、次第に改良が加えられた。大正12年(1923年)の関東大震災では、棧瓦の裏に突起を付けてすべり止めの工夫をしたものが、瓦の屋根からの脱落防止に大変有効だったという[4]。さらに、第二次大戦以降、毛細管現象による雨水の瓦の隙間への侵入を押さえ、雨漏りを防止するよう改良された“逆水止め付き”が出現した。地道な改良が雨漏りを減らすために効果的であったが、雨が降り続けばやはり雨漏りがしたと思われる。

昭和15年(1940年)3月12日の朝日新聞には、『住宅の長寿法』の見出しで以下の記事がある。戦時下の雰囲気も感じられる。

住宅に発生する黒いカビは風呂や浴室に見受けられるが、あれは伝染性のもので空気条件でトンドン拡がって行くから、塗料の中に僅かの殺菌剤を入れて塗るとなかなか効果的である。

最近トタンの使用制限のため色々雨漏りなどあって困るが、この主要な原因は雨樋に庭木の落葉や風が吹き上げて来た塵埃が溜まってゐるのが多いから、主人もたまの日曜には樋の塵埃を掴み出しをやらねばならない。」

1950年代以降に普及した鉄筋コンクリーならば雨漏りがなくなったかという、必ずしもそうではない。屋上の防水層に地震などで亀裂が入ると、雨漏りがしたという昭和40年(1965年)頃でも、団地の雨漏り問題は十分解決していないことが次の報告[6]から伺える。

豪雨の日に30棟のうち27棟に雨漏りが発生し、ある家では主人が勤めを休んで屋内の家具を移動し、それに防水シートをかけ、ゴム長をはいて、かさまでさして生活をしたというまったく信じられないような事故が起きたのである。(中略)

雨露をしのぐのが住宅と信じ、公団住宅に限って雨漏りなどあるはずがないと思っていた譲受人の期待に反して、入居後間もなくから雨漏りが起こり・・・」

当時、プレハブ住宅の居住者の苦情では、雨漏りが第2位を占めたという一方で、家屋の雨漏りは、直接生命に関係しないということもあって、今日まで、どちらかと言えば、余り深刻視されなかった傾向があるが、」[7]とあり当時の雰囲気の一部が読みとれる。カビについては話題になっていないが、同様に考えられていたのだろう。今読むとまさかと思うほど、隔世の感がある。それだけ、30年余り前に比して、雨漏りに対する感じ方も変わったと言えるし、雨漏りの状況は緩和されたと思われる。

それ以降も雨漏り対策は少しずつ前進した。瓦屋根については、合成高分子ルーフィング材も使用された。今日では、雨が侵入しそうな部分は防水シートで覆ったり、防水テープやシーリング材を有効に用いる工法が普及し、雨漏りが減少したと思われる。

ただし、これだけ改良を続けても雨漏りが根絶した訳ではない。90年代後半にテレビ番組に寄せられた欠陥住宅についての苦情が集められている[8]。『わっ! 雨漏りだ!! 外壁・屋根』の章には次のような例がある。

「わが家は雨が降ると雨漏りがひどく、壁紙がはがれていて、すき間からは腐った木が見えます。壁のあちこちからキノコが生えてきています。すごく不安です。」

今日でも、インターネットで「雨漏り」と「カビ」を検索しても、13,000件ばかりがヒットする。夏の住宅に関するカビ苦情で一番多いのは、現在でも雨漏りが原因である。天井や壁などでも雨漏りのシヨに沿って、カビが生えている場合が多い。

歴史的に見ると、梅雨時の長雨は、雨漏りの最大要因であり、それを防止するのは技術的にも最もやっかいであったと思われる。遅々とはしているがたゆまぬ努力の末、少しずつ押さえ込んで来たのが、雨漏りとカビの歴史なら、だんだん嫌われるようになったのもカビの歴史といえるかもしれない。

\* 古典文学については、いずれも国文学研究資料館 本文データベース検索システムで、岩波書店『日本古典文学大系(全100巻)』を利用した。

#### 参考文献

- 1) 道塚元嘉 .民家のこころ .鹿島出版会 .1999 .p128
- 2) E. S. モース (齊藤正二・藤本周一訳) .日本人の住まい .八坂書房 .2000 .p401
- 3) イサベラ・バード(高梨健吉訳) .日本奥地紀行 .東洋文庫 240 .平凡社 .1973 .p387
- 4) 平井 聖 .屋根の歴史 .東洋経済新報社 .1973 .p208
- 5) ジョン・セイヤー他 .モースの贈り物 .小学館 .1997 .p274
- 6) 増岡武正 .公団分譲住宅の雨漏りについて .建築雑誌 1976 91 :1022
- 7) 佐治泰次 .屋根の雨漏り考 .建築雑誌 1976 91 :1057
- 8) 日本テレビ(編) .我家は病んでいる .日本テレビ .1998 p172